

思想のトポロジー

パイドロス篇の構造とその 背後に潜むもの

山口 拓 夢

[キーワード：① 流動性 (fluidity)；② 現実 (reality)；③ 策略 (tactics)；
④ 自然 (physis)]

パイドロス篇の冒頭で、弁論好きのパイドロスが医師アクメネスの説に従って散歩をしている。医師と弁論家の親しい交際はアテナイでは珍しいことではない。饗宴篇のなかでの医師エリュクシマコスの演説からも察しがつくように^(注1)、紀元前5世紀のアテナイの医師はすでに呪術的な伝統から遠いところにあり、自らの理性を信頼し、“合理的な”技術に自信を持っていた。弁論家や医師や政治家たちは、神話よりも技術を世界の中心に据えて神々に対して距離を保ち、自己の利益に関して配慮するという点では共通していた^(注2)。彼らはプラス面でもマイナス面でも、当時の市民の意識を代表していた。市民はポリスにとって有益な存在として自己を“構成”することを求められる。(敢えて構成と言おう。というのも、ポリスの理念、行動、美意識といったものの無数の規範が存在していて、市民

は生まれたときからその規範から逸脱しないように教育を受け、あるいは自ら学習して他者との関係のうえに自己像を紡ぎだしてゆくことを余儀なくされるからだ。ポリスに存在している暗黙の、無数のコードを引用して自己を構成しなければ、彼らは彼らにとっての「人間」つまりポリス的な生き物として生きることができなかった。) パイドロス篇のリュシアスの演説文のなかに「恋していない人々の場合には、いまだかつて誰も家の者から『そのせいで自分たちの事柄について悪く配慮している』と非難された試しはないのだ。(以下略^(注3))」ということばや「次にもし、『人々が二人の仲を聞き知って不名誉が生じないように』と、広く認められている掟を恐れているとすれば、(以下略^(注4))」ということばがある。これらの箇所は、社会的存在としてみとめられる範囲で自己の事柄に配慮しつつ、利益を得る技術を教えるという弁論家のスタンスをよく表している。

M. ドゥッティエンヌと J.P. ヴェルナンによれば、古代ギリシア語のメーティス (*μητις*) ということばは、流動的な、可変的な現実に対応できる能力全般を指している^(注5)。このことばは、思慮という意味のほか、悪巧みとか策略、機知、器用さ、技巧などの意味を持つ。むしろホメロスの時代には、思慮と術策という意味は明確に区別されていなかった。思慮深いということのなかに、敵を欺く機知も含まれていたのである。生活のなかで狩猟や呪術が多く部分を占める文化はスキゾフレニア的な傾向が強い。このような文化では、可変的な現実機敏に対応できる種類の思慮こそ最も必要だった。ギリシア文化は牧蓄と農耕、そして狩猟の文化が複雑に混じり合っていて、時代を遡るほど狩猟文化の影響をとどめている。「策略に富む (*πολύμητις*)」オデュッセウスは、変装や謎かけで窮地を切り抜けるのだ。ホメロスの時代には、少なくとも敵を欺くのは美德だった。そして策略は神々のところかなう範囲でのみ許されていた。ア

クメネスやエリュクシマコスの医術、リュシアスの弁論術、アルキビアデスの政治術は本質的に、可変的な現実に対応するための技術つまりメーティスだった。だが、神託に重きを置いた時代から政治的議論がポリスの動向を左右する時代への移行に伴って、「神々への畏れ」という、メーティスを駆使するときの最低限のエティックスの基盤は失われつつあった。その傾向は、ペロポネソス戦争後ますます顕著になる。つまり、メーティスはいまや操縦不能だった。プラトンは可変的な現実になかば絶望し、永遠に不変な現実を仮定した。そして、可変的な現実に対応できるメーティスに定義的思考で対抗した。それとともに、非倫理的な技術を万能視する弁論家や政治家や医師たちに、エティックスの源泉としての神的な魂を思い出させようとした。「やあ、親愛なるバイドロス、一体どこへ、そしてどこから ?^(注6)」

プラトンによってバイドロスは弁論家や医師や政治家が集まるモリュコス邸から、つまりまさにポリス的なトポスから歩みださせられる。一体どこへ。ソクラテス的な哲学者の価値のトポスへ。モリュコス邸からイリュソス川のほとりまでの距離は、プラトンの眼に映るポリス的価値観と哲学者の価値観との距離だ。バイドロス篇では、モリュコス邸(町)とイリュソス川のほとり(自然)という地理的な図式のうえにプラトンの世界観における二項対立的な図式が重ね合わされている。いうまでもなく、町とは人間が技巧を凝らして作りだしたトポスである。自然とは、人間の思慮分別を越えたものである。また、ひとが神々を身近かに感じるところでもある。いま、技巧的な弁論家は町にいる。そしてプラトンは他方にソクラテスを配置する。これは飽くまで比喻である。つまりソクラテスは普段はアゴラのようなポリスの中心にいながら、絶えずアテナイのあぶ^(注7)として人々の嫌がる話を持ち出す異端的人物であり、裸足で歩くことからして人

工的な繊細さを嫌っていた人物だということがシンボリックに表わされているのだ。そして哲学が神的狂気の系譜に立つことが主張されるこの対話篇の設定として、ひとが神々を身近かに感じる場所が意図的に選ばれているともいえる。プラトンは町からパイドロスを連れだし、哲学のイニシエーションを施そうとしているのだ。だがプラトンの描く哲学者は自然のなかにいながら、眼の前の川のせせらぎや木の葉のさざめきから（あるいはさらに厳しい自然の様相から）ソフィアをみつけたそうとすることはなかった。「わたしの気持ちを察してくれたまえ。というのもわたしは何かを学びたくてたまらないのだ。土地や樹木はわたしに何ひとつ教えてくれないが、町にいる人間たちはわたしに何かを教えてくれるというわけだからね。(230D3~5)」とソクラテスは言っている。プリミティブな文化におけるイニシエーションの場合には自然との具体的な交感から学んでいこうとするが、この哲学者は眼の前の自然を素通りして抽象的な真理へ向かおうとする。そのような形でプラトンは哲学のイニシエーションを描きだすのだ。

パイドロスは一方でリュシアスの書物に傾倒している弁論家としてモリュコス邸に代表されるポリスの価値観の側に立ちながら、他方ではソクラテスの友人として場合によってはソクラテスとプラトンという哲学者の価値観に身を置きかねない、両義的な存在として描かれている。対話篇のなかで、この曖昧なパイドロスに向かってソクラテスは態度決定を迫る。ソクラテスはパイドロスを二人に分割してしまう。「それなら君は、パイドロス、すぐに確かに彼（パイドロス）がするはずのことを、もう今してしまうように彼（パイドロス）に頼みたまえ^(註^B)」。ここで「君」と言われているのは、ソクラテスの友人として嘘つきな人物（彼）に忠告するはずのパイドロスであり、「彼」と言われているのは話したいのに話さないで

自分を隠しているバイドロスである。(このバイドロスは、恋している自分を隠しているリュシ阿斯と構造的に相同だ。) プラトンはバイドロスを曖昧で両義的なままにしておかない。プラトンはここで弁証法的思考法に従っている。この対話篇でソクラテスが弁証法を説明する箇所があるので参考のため引用しよう。

Φ. 弁証法の統合とはどんなものでしょう。

Σ. 多様な仕方で散乱している事柄を見定めて、ひとつの形相へ導くことだよ。それぞれを定義して、それぞれのことについて正しいと常にみなすことができることは何でも明らかにするためにね。

Φ. それなら、統合と対をなす分割という方法とはどんなものでしょう。

Σ. 分割法とは、今度は逆に形相に従って、生まれつき伴っている関節で物事をばらばらにできるやり方、つまり下手な肉屋のように部分を壊そうとしないやり方のことなんだよ。(何下略)^(注 9)

分節化とは言語成立の基本的原理であり、理性的思考はそれに従う。プラトンはそのような分節化によって事物の本質的な切り分けが可能だと考えていた。現代言語学の術語である分節化 (articulation) は、関節を意味するラテン語 *articulatio* から派生したことばである。ソシユール言語学では、(1) 音の違いによってことばが区切られていくこと、(2) そのように音の違いによってことばが区切られていくことで、ことばの意味が区切られていくことを示す^(注 10)。さらに音素だけではなく、一般に「意味作用の差異化とともに意味内容が区分けされること」を示す場合がある。この分節化によって連続的な現象が切断され、それぞれ別のものとして限定され、また同じ記号を付与された多種多様な現象のあいだの微妙な違いが無視されるという事態が生じる。分節化とは最大公約数的な「意味の規格

化」を引き起こすものだ。言語の同定的性格と、現象の連続の色調との距離が、アイデア界と人間との距離だったのではないか。

ふたりのパイドロス。対話篇のなかでパイドロスは弁証法的に引き裂かれてしまった。弁論家の多義的な存在のモードに対してソクラテスは分節的思考によって対決する。暗黙のうちにパイドロスは、そして読者は、流動的な現実在即して身を変えるメーティスを身につけた弁論家の価値観に立つのかあるいは分節的思考によって真理を追求する哲学者の側に立つのか選択を求められている。けれどもパイドロスにはメーティス的でありながら真理を追求するという第三の方向を選択する可能性がある。真理とよばれているものは、定義によって到達できるものではなく、移りゆくこの世界のなかに、とりわけ人間が技巧を凝らして作りだした決まりごとを取り払った世界のなかに、滲み出てくるのだ。感覚を軽蔑し、肉体と魂を分けて肉体を低くみなすのではなく、五感と知性が一体となった最も研ぎ澄まされた存在として世界のありのままの姿を垣間見ることが必要だ。生々流転してゆく世界がそのまま真理の蜜を分泌しているのだとしたら、機敏に現実の変化に対応できる能力としてのメーティスコそ哲学者には必要なのだ。そしてありのままの世界に根差したエティックスを見つけ出すべきなのだ。しかし、プラトンはこの世界に生きていることを致命的な不幸のように感じて、具体性から早々にひきあげて抽象化へ向かう。

プラトンは、ソフィストや弁論家の多くが、半ば理性的でありながらその理性を悪用して、ポリス社会を混乱させているのを知っていた。彼は理性的思考を徹底させる一方で話をする際のエティックスを確立することを望んでいた。そしてそのエティックスをどうすれば「哲学的な生」に向けて様式化できるのかを模索していた。そのことにいちばん適しているのは、魂の深部に根ざして、魂を駆り立ててゆく恋だ、とりわけ生殖と

無関係で、その代わりロマンティックな幻想を払拭して純粹にロゴスを生む可能性が高い同性愛だと考えた。そこでリュシアスのような弁論家の恋愛論と対比させて哲学者の恋を考案した。

リュシアスの書物の恋愛論は、市民たちの常識の裏をかいたセンセーショナルなものという設定となっている。リュシアスの弁論は、恋していない者が相手を手に入れることをもくろむ。それは、恋愛の煩わしさを引き受けることなく恋愛の快楽を享受しようということに他ならない。まず当時の同性愛の状況に照会して、この演説文を解説していこう。R.E. アレンはこのように説明する。

「同性性愛に関するノモスは、ほとんどの場合において簡単なものだった。いくつかのギリシアの都市は許しているし、ほかのいくつかの都市、特に外国人の統治下にあったイオニアにある諸都市は禁じている。アテナイにおいては法律や慣習は複雑で、理解するのが難しい。人々は一般的に、どんなにその人が相手に迷惑をかけている場合でも、恋する男の求愛を認めている。そして法律は非難されることなく求愛が行われるのを認めている。その認可は、誓いを破ることにまで広げられている。というのも性愛に関わる契りは通常の誓約のように人を拘束していないという訳だ。他方で、アテナイの親たちは自分の息子たちが求愛者と話をするのを妨害しているし、同世代の友人や年長者から誘いに乗ったとって非難されるのだ。つまりアテナイでは同性性愛は美しいとも醜いともみなされているようだ(注 11)」。

このような状況下にあって、もし醜いと非難されることなく公然と同性性愛の目的を達することができたなら、多くの同性性愛者にとって何よりの朗報だったに違いない。他者との関係性において、いくぶん抑圧されている強度の欲求と結びついたこの弁論は商品価値の高いものだ(注 12)。リ

ュシアスの書物は人々の利害への関心に訴える。口説いている者は「ὡς ἂν ἄριστα περὶ τῶν οἰκείων βούλευσαιντο」(231A5) 自分自身の事柄について最善のことを配慮するようなしかたで」相手に尽くす。そして恋される少年のほうは「τοῖς μάλιστα ἀποδοῦναι χάριν δυναμένοις」(233E6~7) 最大限、恩恵を返す能力のある人々に」身を委ねるように勧められる。これはエロスという制御が難しいものを契約関係へと移行させる試みだった。正気であるよりは病気だと自ら認め、「οὐ δύνασθαι αὐτῶν κρατεῖν」(231D4) 自分を制御できない」恋する人々は、契約実行能力がないために退けられるのだ。プラトンは真実在（“οὐσία ὄντως οὐσα” 247C7）に向かって思惟する自らの哲学に倫理的正当性があることを主張することによって、弁論術の巧妙な恋愛論に反論しようとした。そのためにソクラテスのふたつの演説は、さらに巧妙な仕掛けを必要とした。

ソクラテスの第一演説では、当時の同性愛の様式を踏襲して、少年は受動的な役回りを課せられている。その関係を示すために第一演説は次の警句で締め括られている。

「実際、このことを、年少よ、熟慮しなければならない。そして求愛者の好意は親切心から生じるのではなく、餌の流儀で、満足のために、狼が羊を好むように、そのように恋する者たちは少年を愛するのだと知らなければならぬ(注 13)」。

だが実はこの語り手に従順な少年が、言われたとおりに「熟慮」し、「知る」ことを欲するならば、「神聖な哲学」（“ἡ θεία φιλοσοφία” 239B4）が「最も知性の存在を示すもの」（“φρονιμώτατος” 239B3）だと既に言われている以上、知を愛する語り手に倣って自らも知を愛する営みに参加することになり、後に第二演説で語られる哲学的恋愛関係に移行するというトリックが仕掛けられている。

またプラトンはソクラテス第二演説で哲学を神的狂気の系譜のうえに位置づけることで、哲学の倫理的正当性を強調する。人間を越えた神聖な領域との関係性を回復することで(饗宴篇でプラトンはエリュクシマコスに、神託は神々と人間との“κοινωνία” 188C1 つまりコミュニケーションだと言わせている。)弁論家に欠けていると思われた「話をする際のエティックス」を確立しようとしていたのだ。

ソクラテス第二演説のなかで、プラトンは、デルポイの巫女(“Δελφοῖς προφῆτις” 244A8) やドドネの女神官(“Δώδωνη ἱέρεια” 244B1)などを例にとりながら、神から与えられた狂気の第一に神託の予言術を挙げる。続いて第二に罪の浄化と秘儀(“καθαρμῶν τε καὶ τελετῶν” 244E2)を、第三にムーサたちによる神がかりと狂気(“τρίτη δὲ ἀπὸ μουσῶν κατοκωχῆ τε καὶ μανία” 245A1~2)を挙げている。そして最後に哲学者の恋の狂気が、神的狂気の最善のものとして位置づけられる。(245. B~C) それとともにプラトンは哲学以前の3つの神的狂気を哲学のなかに取り込もうとする。

まずプラトンは単なる占い(“οἰωνιστική” 244D1)と神託(“μαντική” 244C5)及び“μανική” 244C2)を区別したうえで、神託のほうを高く評価している。占いが「ひとつの事物の体系の差異(例えば星の運行や、パターン化された鳥の飛び方など—引用者)を他の事物の体系(例えばパターン化された人間の運命—引用者)に投影し、二つの体系のあいだに恣意的なコードを設定することによって成立している(注14)」のに対し、シャーマニスティックな神託の技術は神的次元と魂がひとつに結ばれているという、プラトン哲学が望む状態に可能性を開くものだった。E.R. ドッズはプラトン哲学とシャーマニズムとの関係について、こう書いている。

『もともと神聖でありながらも肉体のなかにいるために罪悪感を抱いて

いて、幽体離脱によって、汚れた肉体から逃れ出ようとするオカルト的自己』と『一種の知識を徳と考えるぐらいに合理的な、ソクラテスの説く魂』をプラトンは同一視する。ここに（思想史における一引用者）決定的な段階があった。この段階では旧来のシャーマニスティックな文化パターンを徹底的に再解釈することも行われた。けれども依然としてこの文化パターンは生命力を保っていたから、プラトン哲学のなかにシャーマニズムのおもな特徴がいまだに認められる。“転生”は変更されずに維持された。シャーマンはトランスによって自由自在に肉体からオカルト的な自己を離脱させる。これはプラトン哲学では、合理的な魂を浄化するための精神的な隠徳や、精神集中の練習へと形を変えた。実際プラトンは精神集中の方法を説明するために、シャーマニズムの伝統的な語り口を借りている。（パイドン篇、80E 及び 83A～C. ードッズ）また、シャーマンはトランスのときにオカルト的な知見を獲得する。これはプラトン哲学では形而上学的真理の幻視に形を変えた。（パイドロス篇 247C3～249D4—引用者）。シャーマンは、この世での前世の有り様を思い出すことができる。これは、プラトン哲学では非物体的な形相の想起という学説に転用されて、新しい認識論の基礎となった^(注 15)】。

つまりプラトン哲学はシャーマニズムの文化パターンを借りて形而上学の理論を構築し、整備していったのだ。そしてまさにパイドロス篇は、既成の神的狂気を取り込みながら形而上学が発生する現場なのだ。驚くほど多様な呪術的要素がこの対話篇には散りばめられている。例えば「…他方、哲学者たちの魂は千年の三回目の道行きのときに、もし彼らが例外なく三回ともそのような（つまり哲学的な一引用者）生を選び取るなら、すぐさま羽根を授かって三千年目に離れてゆく^(注 16)」という箇所はオルフェウス教説から借りてきたものだ^(注 17)。また「だが美はそのとき、見る

にも輝いていた。そのときというのは、幸福な合唱隊とともに、幸福な光景や有り様を、我々はゼウスの後に従い、ほかの人々は別の神々に従って見ていた、そして秘儀のなかでも最も幸福だと当然言える秘儀に参加していたそのときである。自らが完全であって、後に我々を待ち受けている諸悪にも染まることなく、完全で純粋で不動かつ幸福なアイデアを祝福し、完全な光のなかで奥義を許されていて、我々が牡蠣の流儀で縛りつけられて連れ回っていま現在は肉体 (*σῶμα*) と呼んでいるものに葬られてもいないで、まさに清浄そのものであるような我々がその秘儀を行っていたときのことだ(註18)。」という場面は、おそらく高次の世界を何らかの光景で参入者に開示するエレウシスの秘儀や、肉体を魂の墓だとみなすオルフェウス教やピュタゴラス派、あるいは一説によるとヘラクレイトスの教説から、組み立てられている(註19)。しかも、例えばディオニュソス教の場合にはディオニュソスという単一の神の後についてゆき、野山を駆け回るのだが、プラトンはヘスティアを除く十二神すべてを行列の先頭に立てて、野山どころか宇宙の彼方まで信徒を行進させる。「さて天空における偉大な指導者ゼウスは、羽根の生えた馬車を操り、すべてのものを秩序づけ、世話をしながら真先に進む。十一の隊に並べられた神々とダイモンの軍隊がゼウスに従う。というもヘスティアだけは神々の家に留まるから。その他のうち、十二神の数に入っている限りの、支配する者として任ぜられた神々は各々が組み込まれた隊列で先導する。実際、天の内側には多くの幸福な光景と道があり、幸福な神々の種族は彼らのうちのそれぞれが自分の仕事をしながら、それらの道を巡る。常に望んでいて、能力のある者はついてゆく。というも神々の合唱隊の外側に嫉妬は留まっているから。だが彼らが饗宴に向かい、聖餐に行こうとするときに、天の果ての最上部のアーチのうえを頂上まで彼らは行進する。一方で神々の馬車は左右釣り合

っていて良く従うので容易に進むが、ほかの馬車のほうは苦勞して進む。なぜなら悪い性質 (*φύσις* を補う—引用者) を分有している馬は駁者のうちの誰かによって良く育てられない限り、地上に傾き、重くなって前進を妨げるのだから(注 20)。」

この場面は、ディオニュソス教などにみられる *θίασος* (信徒が神の後に付いてゆく行列) の信仰形態を転用しているだけでなく、ホメロスの「というのもゼウスはきのうオケアノスへ、淨福なエチオピア人たちのところに食事を楽しみに出掛けたのだが、他の神々も皆いっしょに後を追ったのだった(注 21)。」という箇所イメージがおそらく念頭に置かれているし、空を駆ける馬車のイメージはパエトンの神話などでお馴染みのものだ。

このようにプラトン哲学は、哲学者の恋の秘儀を既成の神話や信仰の思考様式を借りて創作した。このとき生まれつつある形而上学的秘儀はそれ以前の信仰のコードに照会して初めて理解可能になる。このようにして哲学的な真理への恋を神的狂気の系譜に連なる秘儀として様式化することをもくろんだのだ。しかしながらプラトンは、多義性のなかに身を隠して話を思わぬ方向に導いてゆく技術を身に付けている弁論家に対抗して、真理を定義によって釘付けにしようとした。その結果、彼の念頭にあった既存の神的狂気とは隔絶した秘儀を作り上げてしまった。神託も宗教儀礼も詩的狂気も、言語の網に裂け目を生じさせて、人間が理性的思考で把握する以前の世界の連続的で流動的な力にみちた在り方を垣間見させる働きを持っていた。世界は、小さな木の葉の細部から真理の蜜を滲ませる。だから五感と知性が一体となった最も研ぎ澄まされた存在として、機敏に現実の変化に即してゆくための能力であるメーテュスコそ哲学者に必要なのだ。そしてありのままの世界たとえ自然に立ち返り、そこから生の現実

差したエティックスを見つけ出してゆくべきだ。プラトンの真理への方法論には身体性があまりに希薄なのだ。思うに「ひとが聖なる知を障害なく得るのは、自らの肉体を有効に働かせるときなのだ(注²²)」。

パイドロス篇はこれまで見てきたように、アモラルでありながら、流動的な現実在即して多義性のなかに身を隠す機敏さを身に付けていた弁論家たちの価値のトポスと、神的な領域との関係性のうえにエティックスを築こうとしながら、定義的思考で真理を捕らえようとした哲学者の価値のトポスという二項対立的な図式のうえに展開される対話篇である。この論文ではそのことを踏まえながら、生成流転する現実在即した哲学の糸口を見つけ出そうとした。以上。

注

- (1) 饗宴篇 185E~188E
- (2) R.E. Allen, "Symposium", Yale U.P. 1991, p. 25 を参照のこと。
- (3) パイドロス篇 234B3~5
- (4) パイドロス篇 231E3
- (5) Marcel Detienne et Jean-Pierre Vernant, "Les ruses de l'intelligence" Flammarion, 1974, p. 9~10 を参照のこと。ただし、論者が調べた限りでは、プラトンには *μητρεις* という語をこの意味で用いた箇所を見当たらず、代わりにもともと「道具、機械、仕掛け」を表す *μηχανή* という語をこの意味に充てている。法律篇 677B7 及びゴルギアス篇 459D6 を参照のこと。
- (6) パイドロス篇 277A1
- (7) 弁明 30E5
- (8) パイドロス篇 228C3~5
- (9) パイドロス篇 265D3~266B1
- (10) ソシュール小事典 '丸山圭三郎' 大修館 1985 p. 277 を参照のこと。
- (11) R.E. Allen, 前掲書 p. 15, L. 39~p. 16, L. 16
- (12) 弁論は商品であるという視点についてはプロタゴラス篇 238D3 を参照のこと。

- (13) バイドロス篇 241C6~D1
- (14) 高辻正基「記号とは何か」講談社 1985, p. 94, L. 5~6
- (15) E.R. Dodds, "The Greeks and the irrational" University of California, 1951, p. 210 L. 1~15
- (16) バイドロス篇 249A3~5
- (17) R. Hackforth, "Plato's PHAEDRUS" Cambridge U.P. 1952, p. 87 L. 7~8 を参照のこと。
- (18) バイドロス篇 250B5~ C2
- (19) H. Jeanmaire, "Dionysos", Payot, 1951
アンリ・ジャンメール「ディオニュソス」言叢社, 小林真紀子訳 p.415 にはエレウシスの秘儀との関連が示唆されている。また, G.J. de Vries, "A commentary on the Phaedrus of Plato" 1969, Amsterdam, p.151 のこの箇所の注では, オルフェウス教ではなくピュタゴラスあるいはヘラクレスの説を下敷きにしているとする。また, R. Hackforth, "Plato's PHAEDRUS" Cambridge U.P. 1952, p. 95, 注1ではヘルメイアスと W.K.C. Guthrie にならってエレウシスの秘儀との関連を述べ, またソーマ・セーマ説(つまり肉体は魂の墓だという説)はオルフェウス教から来ていると主張する。
- (20) バイドロス篇 246E4~247B5
- (21) ホメロス「イリアス」一巻 423 行~424 行
- (22) Aldous Huxley, See E.R. Dodds, "Euripides' Bacchae" Oxford, 1960, p. xiv

The topology of the thought;
the structure and its background of Plato's *PHAEDRUS*

Takumu Yamaguchi

In this treatise, I have made clear these two points: first, the structure of the text; second, the cultural background of the structure.

I have investigated the transition of the type of the intelligence. In the Homeric age, the intelligence called *METIS* was highly estimated. This is the eminent character of the shamanistic culture. The word "METIS" connotes the ability to cope with the fluctuant reality.

In the age of Plato, the sophists, the rhetoricians, the doctors and the politicians had this ability. They were, however, little concerned with the ethical aspect. Plato stood against this type of intelligence by thinking articulately through words. But the third type of the intelligence, which Plato suggested, is still insufficient to reach the real recognition of the world. We must once get out of the linguistic dimension.

(学習院大学人文科学研究科博士後期課程, 哲学専攻)